

近代水産業のあゆみ

館山湾内の新井浦から柏崎浦にかけての浜や高ノ島は、物産の津出しの湊として江戸期より栄え、明治期以降は近代水産業発展の拠点として重要な役割を果たしてきた。その中央に位置する北下台(ぼっけだい)は、海上交通の守り神として信仰される琴平神社を中心とした歴史公園。航路標識であった正木燈台の跡や遭難供養碑などがある。

欧米の万博に学んだ関沢明清は、サケ・マスの人工ふ化や缶詰製造、捕鯨銃などの技術を導入し、国策として近代水産業を発展させた。1889年に水産伝習所を開き、初代所長として人材育成に尽力した。後に、関沢は所長を辞して自ら館山に居住し、水産会社を興し、房総捕鯨の祖・醍醐新兵衛と組んで遠洋捕鯨に成功している。

水産伝習所は官立の水産講習所となり、1901年から北下台のふもとに館山実習所が開かれた。後に東京水産大学を経て、東京海洋大学となった今なお実習所が置かれ、北下台には、

関沢の功績を称えた巨大な顕彰碑が建っている。関沢の没後、遺志を継いだ弟の鍋木余三男は、小原金治や神田吉右衛門らとともに房総遠洋漁業株式会社を興し、冬はマグロ漁、夏は捕鯨やオットセイ漁を行った。



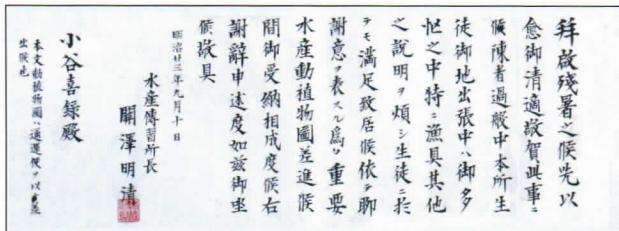
正木燈台跡



マグロ漁で栄えていた富崎村長の神田は、アワビ漁を村営にして収益を共有財産とし、道路や漁港の整備、漁船改良、海難救助、学校設立などの公共事業を展開した。

青木繁「海の幸」誕生を支えた小谷喜録は、神田とともに村政に関わり、水産伝習所の実習を世話したお礼状と「日本重要水産動植物之図」が関沢から贈られた。

この実習で教員として同行していた内村鑑三は、神田と出会い語り合ったことが人生の転機になったと自著に記している。



関沢の書状と「日本重要水産動植物図」(小谷家蔵)



海辺の癒しのまち

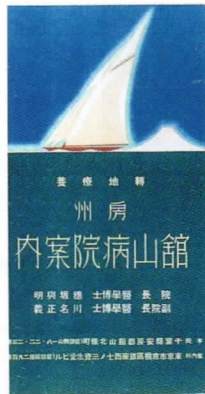
明治期には、温暖な海辺の館山は転地療養の地となり、多くの人が東京の靈巖島から船でやってきた。北下台には海水を利用した湯治場も開かれ、1891（明治24）年には住民の出資によって館山病院がつけられた。初代院長・川名博夫は、近代医学に貢献したドイツ人医師のベルツ博士から指導を受け、全国に先駆けてサナトリウム（結核療養病棟）を開いた。川名夫人の父・福原有信は、松岡村（現館山市）生まれで、銀座資生堂薬局の創業者であり、館山病院は広く政財界に知られた。



明治期の北下台



松岡八幡宮（福原有信が奉納した鳥居）



昭和初期の転地療養パンフレット

実業家の渋沢栄一は、東京の虚弱児童の療養施設として東京府養育院安房分院（現船形学園）を館山に開いた。福原と姻戚関係にあったため、渋沢の渡米時には館山病院二代目院長の穂坂与明が侍医として同行している。

一方、秦呑舟（はたどんしゅう）やコルバン夫妻といったキリスト教医師による医療伝道も、転地療養のネットワークを支えた。妊娠中で結核を患った石川啄木未亡人・節子も八幡海岸の片山かの宅で療養し、次女房江を出産した。文学者・山村暮鳥は北条南町に療養滞在中、自己を自然に預ける超俗の精神に辿り着く。画家の中原淳一が療養した塩見の浜辺には、美しい詩碑が建っている。



中原淳一の詩碑

©JUNICHI NAKAHARA/ひまわりや

